郷土室だより

第70号
平成2年12月27日
編集・発行
東京都中央区立 京橋図書館
東京都中央区築地1-1-1
電話 543-9025

中央区の海岸線（その三）

◇続「日本橋台地」

前号（69号）で紹介した〝埋もれた地形〟である「日本橋台地」のはなしは、私の予想を越えて多くの読者から、大きな反響がありました。

自然地理学の分野ではかなり前から「日本橋台地」や、その東西の「丸の内谷」、「昭和通り谷」という呼称は定着していて、広く使われています。ところがいわゆる自称「歴史好き」の方々にとっては、こうした自然科学ガラミの著書や情報は、それらが存在していることは知ってはいてもあまり十分には読まれないのが、ごく一般的な傾向のようです。

こうしたいわば「理科系アレルギー」があるのにもかかわらず、「日本橋台地」の成因を説く『富士山はなぜそこにあるのか』や『東京の自然史』（ともに貝塚爽平著）が、この図書館の郷土室でよく利用されるようになりました。

◇江戸前島

東京の自然史での表現である「日本橋台地」の上に、ほかならぬ中央区内の日本橋地区・京橋地区、そして銀座地区が〝のっかって〟います。

この「日本橋台地」の範囲が68号以来とりあげてきた。東京の中世史上での表現の「江戸前島」なのです。ここで改めて「日本橋台地」＝「江戸前島」の範囲を、現在の地名で結んでみましょう。

本郷台地とその南端の駿河台から、さらに南に続くこの半島状の低地の、四百年前の海岸線は、その東岸つまり中央区内では、江戸橋―旧楓川（かえで）―真福寺橋―三十間堀の線です。

江戸橋―三十間堀の間のむかしの海岸線は高速道路の江戸橋ICと京橋ランプ間の線にピッタリ一致します。三十間堀の現在はこれまでに書いてきたとおりです。

半島状の江戸前島の南端の海岸線は、三十間堀―新橋―土橋―内幸町交差点にいたる線と考えてよいでしょう。そして内幸町交差点から北に向かって日比谷公園―日比谷交差点―馬場先門―和田倉門―大手町の気象庁辺までの線が、江戸前島の西海岸の線です。

日比谷から大手町まで続く直線のお堀は四百年前の海岸線のなごりともいえます。

江戸前島の西半分は千代田区で、北から大手町・丸の内・有楽町・内幸町地区が続くことはいうまでもありません。

◇五万分の一地盤高図「東京」

ここで二万年以来の「日本橋台地」、四百年以来の「江戸前島」の最新の情報を紹介しましょう。

平成二年の六月から七月にかけて、新聞各紙は建設省国土地理院が、東京を中心にした地域の「地盤高」図をつくったことを報道しました。

これは東京区部を中心に、北は埼玉県南部、東は千葉県西部、南は神奈川県北東部の範囲の地域の「地盤高」を一m間隔の等高線と六色の色別であらわした地図です。

いわゆる〝ゼロメートル地帯〟もひと目でわかりますし、高潮災害が起きた場合、どのように海水が陸地に侵入するのかも予測できます。地盤沈下や防災上の基本的な情報源として、とても便利なものです。

さらにつけ加えますと、いま世界中で深刻な問題になっている地球温暖化の影響が現実のものとなって、海水面が上昇を始めたとき、どの辺までが「海」になるのか、という予想も出来る地図です。新聞各紙がそろって取り上げたのはもっともなことだったのです。

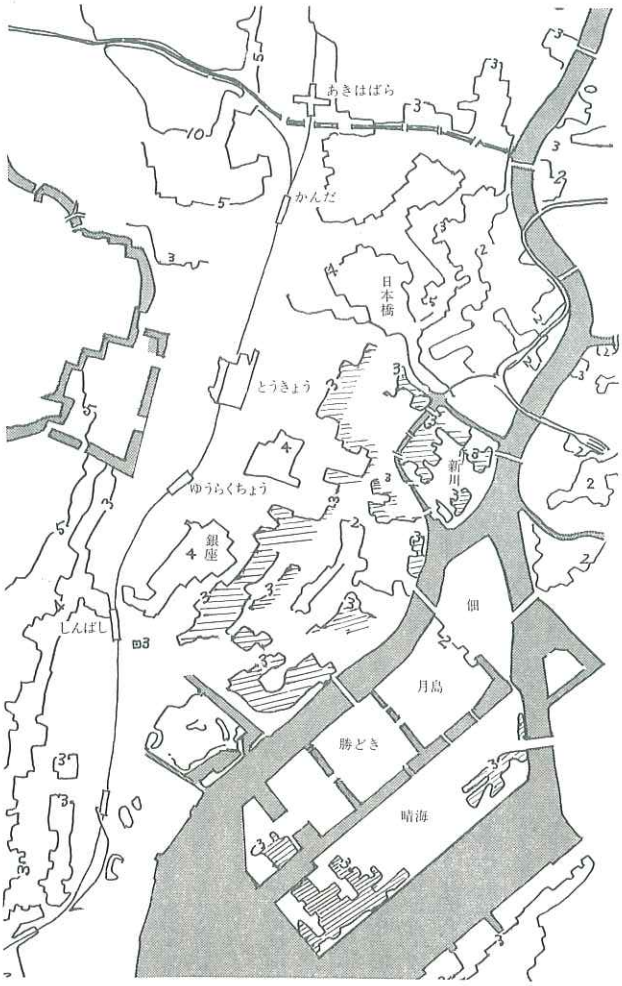
図はこの「五万分一地盤高図　東京」から「江戸前島」の部分と区内の埋立地の分布を示したものです。

図でおわかりのように「日本橋台地＝江戸前島」の範囲は、みごとに地盤高三mの線の中におさまっていることがわかります。

家康江戸入り以来四百年間、この場所は絶えず人工の営みが加え続けられてきたのですが、そのおおよその原形は、地盤高三mの線で相当にはっきりとあらわれているのです。

また図の最上部の駿河台から「半島状」の低地が、南にのびている形もよく読みとれることと思います。

さらに図の斜線の部分は、上から茅場町・八丁堀・新川・築地・月島・晴海の各地区ですが、これらはこの四百年間に陸地になった場所であることもまたいうまでもないことです。



◇埋立地の高さ

埋立地といいますと、ベタ一面にたいらな土地を想像しますが、図のとおり築地地区などは、ずい分デコボコしていることがわかります。

明治以来の埋立地の月島の場合、その最先端の地盤高が三mで、いちばん高いこと。それに続く大正から昭和はじめにかけて埋め立てられた晴海地区の場合も、地盤高三mの部分は、やはり最先端部と相生橋の南側に片よっていることが確認できたのは、私にとっては新しい発見でした。

同じようなことが東京湾内の多くの埋立地でもいえます。つまり傾向として埋立地が「沖」に行くほど「地盤高」が高くなります。図では見えませんが夢の島では一〇mの地盤高のある場所があり、その南に続く十号地（新木場）では二〇mもの地盤高を持つ場所もあります。

ゴミ処理の中心地の中央防波堤の「本土」側には地盤高三〇mの場所さえあります。三〇mといえば丸ビルの高さでもあり、皇居のある山の手台地の平均的高さでもあります。

水上バスなどで何回かあの埋立地のそばを通ったことがありますが、あのゴミの山の雄大さの原因は、海抜三〇mもあったためだと、この地図を見てはじめて〝なっとく〟できたことでした。それにしてもよくぞあの体積にまでゴミをつみあげたものだと、ただただ感心するばかりです。

四百年前の埋立地のつくり方は、三十間堀の項でみたように、大きな石を埋立て予定地のまわりに置いて、そこから土やゴミを入れて埋立てを始めました。

近代から現在の埋立地のつくり方は埋立て予定地の護岸が丈夫に造れるようになったため、二〇mも三〇mもまるでソフトアイスクリームを盛り上げるように土を盛り上げることが出来るようになったのでしょう。

そう気づきますと、図の築地の地盤高のデコボコは、いわば〝手づくり〟の埋め立てを物語るものともいえるで

しょう。

◇落語の『野晒し』

この『郷土室だより』についての読者のご感想やご意見は、いつも郷土室の係員を通じて見せていただいています。その中にK市のS氏から寄せられた痛烈なご批判を紹介しましょう。

それは68号で引用した明治三九年の三十間堀改修工事の際の東京市の技手吉田信近氏の報告書に関するものでした。

お手紙を要約しますと「毎号興味深く読んでいる。しかし自分にはどうしても納得し兼ねぬ箇所があるので一筆する」という書き出しで、「吉田技手の報告行為それ自体は大変貴重なもの」であり、「現在、多くの建設工事にたずさわる技術者が、せめて吉田技手の観察と配慮の百分の一でもやってくれれば、もっとわれわれの周囲の地史は豊かなものになるだろう」といわれます。

しかし「百年も前の吉田技手の観察に鞭を加える気はないが」なぜあの報告書の引用について、もう少し注意しなかったのか―とのおしかりでした。

問題の箇所は報告書の原文に「一つの髑髏を発掘せり。一瞥男性にて、年齢四十前後なるべく、是亦一考に値す可きものなる歟」というくだりで、なるほどS氏のいわれるように「落語の『野ざらし』ぢゃないが、〃人骨、野ざらし、つまり髑髏、されこうべ〃を一目みて四十歳前後の男性だと推定したのは、推定のし過ぎではなかろうか」という指摘でした。それに加えて現在の解剖学や人類学者でも「一瞥」で性別・年齢はなかなか推定できないと聞き及んでいるのに、専門外の土木技手がそうした判定を下した根拠は何だったのだろうかという疑問も副えられています。

つまりS氏は報告書はそれなりに尊重するとして、そうした問題点をそのままに『東京市史稿』に採録したり、さらにその採録されたものを「なんらの検討も加えずに、引用するのは許せない」という論旨でした。

いわれてみるとまさにそのとおりでした。引用するからには引用者としてのベストをつくした引用のし方でないと、「事実」なるものがどこまでも曲がっていってしまいます。

こうした注意を下さったS氏は、お手紙の最後に「でも案外この〃一瞥、男性、四十歳前後〃の骨は吉田技手の見あやまりで、『野晒し』のとおり十七、八の色っぽい女性の骨だったかもしれない……」と、しゃれたオチをつけて結ばれています（なおこのお手紙は、匿名をご希望でしたので、こんな形で引用させていただきました）。

◇『掘り出された江戸時代』

高度成長期を中心とする一時期、中央区内でも実に多くの建設工事が行れました。そしてたいていの場合、その現場から人骨が発見されてきました。

その時期に一貫して調査されてきた方が『掘り出された江戸時代』（雄山閣刊）の著者の川越逸行先生でした。

先生は鉄砲洲で生れたきっすいの〃中央っ子〃で、本業は歯科医師ですが昭和三二年に「湯島無縁坂出土の江戸時代人頭蓋骨の人類学的研究」で医学博士の学位を得、母校の日本歯科大学や慈恵会医科大学の講師はじめ〃骸骨の先生〃として警視庁嘱託としても活躍されました。また昭和四五年から中央区教育委員に選任され、二期目在任中の昭和五二年二月五日惜しくも逝去されました。

京橋図書館の「東京を語る会」にも昭和四六年二月二七日には「江戸時代人の骨相」という題で、昭和四七年九月一六日には再度「東京を語る会」で「よみがえった二百四十四年前の御側室」という興味津々のおはなしをして頂いたこともありました。

◇収集・視察の記録

『掘り出された江戸時代』の末尾の「収集・視察日誌及び参考文献」の項には、川越先生が昭和二九年八月一〇日から、昭和五〇年五月一九日までの人骨の視察・収集に出向いた年別回数と項目表（引用者注＝調査内容）があり、回数では二二年間になんと七三三回。項目表の発見場所では、建築工事現場三二七回、地下鉄工事現場一五〇回、土木工事現場五〇回をベスト3に、合計一六項目七三三回の調査回数のうちわけを掲げられています。

この多数の収集・視察の個々の状況は、先生の『掘り出された江戸時代』をごらんいただくほかはないのですがその中でとくに注目したいのは、この七三三ヵ所の調査地点を地図で示した「東京都内発掘地図」の説明に、

都内の江戸時代の遺体発掘場所を地域的にみると、一番多いのが中央区内で、この地域から発見されるものは、はっきり寺院の跡と思われない状態のものもかなりある。

次が台東区内でこれは当時、寺院が多くあったためでその改葬もれと

思われるものが大部分である。

三番目に多いのが港区内であるがこのあたりは寺院の跡と思われるものが多い。

世田ヶ谷と大田区内のものは、ほとんど古墳である（以上同書二六八～九ページより引用）。

とあります。さらに同書の「収集・視察日誌」（昭和29・8・10～50・6・27間）によって、先生が中央区内で調査された件数を数えてみましたら、合計一九二件もありました。

この日誌は調査一件ごとに、その年月日、調査地点、人骨出土地層の深さ、人骨発見の原因などが書かれているもので、その一例を掲げますとつぎのような形式です。

「昭和三〇年一〇月一九日　中央区日本橋本石町三－四　四・二㍍　建築」

といった具合に書かれています。この集計のさい、同じ場所が何回も出てくる場合がありましたが、人骨出土層の深さがそれぞれ異なっていました。

また地番や出土地層の深さを欠くデータもありましたが、全体を通してみた場合、先生が現地に行かれ人骨を確認した場合を一件として記録されているように読みとれました。

◇江戸前島の骨と埋立地の骨

「収集・視察日誌」で中央区内の地区別人骨発見状況をみることにします。まずいちばん多かったのが銀座西の二三件、ついで銀座の一七件でした（ここでお断りしておきたいのは、区内の地名は住居表示前と現在の地名が混じっていますが、わざとそのままにしてあります。理由は少しでもその地区の細かいニュアンスをお伝えしたかったからです）。

この二つの地名は、ほかならぬ地質学上の「日本橋台地」、江戸中世史上の「江戸前島」の上にある地名です。そこで他の江戸前島の範囲の町名とその件数をみますと、室町五件、日本橋通一件、本石町八件、京橋三件、江戸橋六件、本町三件、馬喰町四件、橋町七件、堀留七件、人形町二件、久松町二件、宝町五件、八重洲二件、本銀町一件の合計九六件、これも偶然なのですが川越先生が中央区で調査された件数のちょうど半分なのです。

そうなるとあとの半分の九六件は埋立地の人骨になるわけです。埋立地でいちばん多いのは八丁堀二〇件、築地一六件、芽場町八件などをベスト3に広範囲にひろがっています。いずれも江戸時代に墓地が多かった地帯を含むものなのですが、さきに川越先生の「東京都内発掘地図」の説明中の〝はっきり寺院の跡とも思われない状態のものもかなりある〟有様を物語っています。

◇見かたを変えると

このような記録は、中央区内をはじめ都心部にはずい分多くの人骨が埋まっていたことを物語るものです。しかしそのほとんどは高度成長期のビルや高速道路・地下鉄、それとオリンピック東京大会準備のための工事のさいに見つけられたものです。そして、区内一九二ヵ所の人骨出土ということは、この時期にいかに多くの工事が行われたかを雄弁に物語るものでもありました。

ところが最近の都市再開発ブームはますます大がかりになってきましたが、人骨はじめ埋蔵物に関する情報は極端に少なくなりました。その最大の理由は、文化財関係のモノが発見されると、その調査は「原因者負担」になったため、埋蔵文化財はヤミからヤミにほうむることが工事関係者の常識になったためといわれます。（三芳　亘）

郷土室より

◈第61回東京を語る会が、平成二年十二月十五日（土）に開催されました。

テーマは「都政とは何か・都政の歴史」で、都留文科大学教授の日比野登先生にお話をうかがいました。

昨年12月に、東京自治センター顧問の須田春海先生をお招きした第58回東京を語る会「大きすぎる東京をコントロールする方法」のサブテーマ〝都市東京の過去・現在・未来〟シリーズ第二弾という形です。

今後も、江戸時代から未来までも視野に入れた、巾広い企画をしていけたらと思っています。

日比野先生の講演の概略をごく簡単にご紹介します。

はじめに　都政とは行政か政治か？

1　戦前の東京の政治

ビアードの「東京市政論」

後藤新平の大風呂敷―震災復興計画

東京府と東京市の抗争

2　戦後の東京の政治

都知事をめぐる政治勢力

安井・東・美濃部都政

後半はかけ足になっていまいましたが教科書ではわからない都政のしくみをお話しくださいました。